書評

谷口　雄太

『〈武家の王〉足利氏―戦国大名と足利的秩序』

（吉川弘文館、二〇二一年）

室井　康成

一

世は室町時代史ブームである。巷間には、もともと戦国武将や中世城郭・局地的な合戦に興味を抱くコアなファン層は存在したが、近年の特徴は、複雑な政治的背景を十分に踏まえなければ理解できない戦乱を扱った著作にベストセラーが相次いでいることだ。近いところでは『応仁の乱―戦国時代を生んだ大乱』［呉座　二〇一六］・『観応の擾乱―室町幕府を二つに裂いた足利尊氏・直義兄弟の戦い』［亀田　二〇一七］がある。そして建武政権崩壊の引き金となった東国の騒擾を描いた『中先代の乱―北条時行、鎌倉幕府再興の夢』［鈴木　二〇二一］までもが一般書として刊行され、順調な売れ行きを示しているという。

これらの著作で取り上げられたテーマは、日本史上の著名な出来事であっても、その内実はあまり知られていないのではないか。しかも、信長・秀吉・家康といった有名人が活躍するずっと前の時代である。ＮＨＫの大河ドラマでも『太平記』（一九九一年放送）や『花の乱』（一九九四年放送）で取り上げられたことはあったが、源平・戦国・幕末モノが繰り返し映像作品化されるのに対し、この時代を描いたのは上記の二作のみである。

したがって、少なくとも現代の日本人にとって、この時代はけっしてメジャーであるとは言い難いのだが、それが平成時代の後期にいたり、にわかに脚光を浴びたのは、それだけでも現代日本の思想史的問題である。この点に関する私見は後述するとして、右に掲げた近年の話題書のすべてにおいて主要人物として登場するのが、各地の有力武家の盟主として将軍職を継承した足利氏である。よくも悪くも、中世に起きた〝日本史の教科書レヴェル〟の著名な戦乱には、足利氏とその係累が直接／間接に関わっているケースが多い。逆に、足利氏は傀儡に過ぎず、実権はその時々の有力者に奪われていたというパブリックイメージも根強くある。

このように、その知名度の高さに反して、とらえどころのない立ち位置にある足利氏だが、それが室町時代を通じて、たとえ名目上ではあっても武家社会の頂点に君臨しつづけたのは、考えてみると不思議である。その謎の解明に、当時の武家連中から看取される「共通価値」という視点から迫ったのが谷口雄太氏の新著『〈武家の王〉足利氏―戦国大名と足利的秩序』（以下、本書）である。まずは本書の章立てを挙げておこう。

・なぜ、足利氏は続いたか―プロローグ
・共通利益と共通価値（力の体系・利益の体系・価値の体系／戦国期の将軍と大名）
・足利絶対観の形成（上からの努力／下からの支持／権威のメカニズム）
・確立する足利的秩序（足利一門の基礎知識／足利一門か、足利一門以外か／足利一門になるということ）
・なぜ、足利氏は滅びたか（足利の血統の価値低下／上からの改革）
・足利時代再考―エピローグ

谷口氏には、すでに同様のテーマで書かれた大部の専門書『中世足利氏の血統と権威』［谷口　二〇一九］がある

が、本書はさながら、その内容を一般向けに書き改めた入門書のような趣を呈している。以下、本書の独創的な視点について少しく論評していくが、評者の専門は民俗学であり、本書のテーマに関わる研究動向を十分に把握しているわけではない。そのため的外れな指摘をするかもしれないが、この点はあらかじめご海容を願いたい。

二

本書によると、巷間でイメージされるであろう〝足利将軍無力論〟は、近年の歴史学では徐々に修正されているようだ。その代表的業績として著者が挙げるのが、山田康弘の研究である［山田　二〇一一］。

山田は、群雄割拠の室町時代を通じて足利氏が将軍家であり続けたのは、足利政権を下支えする各地の武家にとって、足利氏の存在そのものに利用価値があったからだとする。具体例としては、戦国大名どうしの停戦調停に、将軍から発出される御内書などが効力を発揮したことや、あの織田信長が、亡命中の足利義昭を奉じることで上洛を果たしたことなどである。

つまり、足利氏は将軍としての「権威」を、各地の武家は種々の「実利」を得られることから、両者は相互に利用

価値があったというわけだ。著者は、この視点が「将軍（幕府）を国際連合のような存在と位置づけ」、「ひとつの日本」を志向する武家社会の依代だったことを描出したとして高く評価し（二五頁）、こうした関係性を生じさせた何事かを「共通利益」と呼ぶ（六頁）。

要するに、近年の歴史学における足利氏のイメージの転換は、この「共通利益」への積極的評価に基づくものだが、同時代の史料を広くみていくと、将軍足利氏の意向をリジェクトする武家勢力も確実に存在した。もっとも、従前の室町時代史研究は、こうした「共通利益」の域外に位置する大名や国人領主の自立性にフォーカスする方向で進められる傾向が強かった。したがって、「共通利益」だけでは足利氏の特異な立ち位置を説明しきれないことは言を俟たない。著者の言うように、足利氏は「共通利益」という面では「無力ではなかった」が、すべての局面において「有力でもなかった」のである（二～四頁）。

そこで著者が注目するのが、「われわれ（国家・共同体）を結びつける糸ではあるが、通常目には見えない、不可視で透明な存在」であり、足利氏を頂点として、その下に連なる武家たちの力関係を整除し、秩序づけた価値観である（二九頁）。これこそ本書が追い求めた「共通価値」ということになる。

三

また、本書によると、件の「共通価値」の成立要件としては、「何よりもまず足利氏であるという血統（象徴性・正統性）そのものが重要」であるという。そして、その血統に連なる人々（異姓の分家筋も含む）を「貴種」として特別視し、彼らを上位に推戴すべしとする武家連中の序列意識が、足利将軍家を一五代まで在位せしめてきたというのである。これを本書では「足利的秩序」と呼んでいる（三一頁）。言を換えれば、それは「血統」こそが権威の源泉だったということであり、この意味では、本書が足利氏を「武家の王」と表現したことに、私として特段の違和感はない。

問題は、かかる「共通価値」が形成された時期と契機である。

まず時期については、足利尊氏による室町幕府創生から約半世紀以上が経過した三代将軍・義満の時代であった。このころまでに、足利氏が「対抗可能な存在」（相対的存在）から「武家の王としての存在」（絶対的存在）へと変化し、イデオロギーの面でも、足利氏が源氏の嫡流ゆえに武家の棟梁たりうるとする観念が成立したという（三八～四二頁）。

また契機については、各地の武家の中で、単独では足利氏への対抗が不可能であるとの理解が広まったことであ

る。これは足利氏サイドがとった「暴力でもってライバルを圧倒し服属・沈黙させ」、そして「足利氏に挑戦するという発想そのものを相手の脳内から永遠に消し去る」という戦略が奏功した結果とされるが（四二頁）、そのエポックメイキングとなった事件として、著者は足利義満の治世下で発生した「小山義政の乱」を挙げている。

この戦乱は、天授六年／康暦二年（一三八〇）に小山城（栃木県小山市城山町）主の小山義政が、関東公方・足利氏満に対して起こしたもので、約二年後に義政の自害によって収束した。小山氏とその同族の結城氏は、藤原秀郷流を称する関東の名族で、鎌倉時代から幕府に対し、足利氏と同等の礼遇を求めるなど、元来足利氏を武家の棟梁としては認めない立場であった。だが、小山義政の没落以降、結城氏は本姓を捨て去り、足利氏と同じ源姓を名乗りはじめるのである（六〇頁）。これはまさに、地方の名族が足利氏の威光に服し、「足利的秩序」に組み込まれたことを意味している。

その後も、足利氏や幕府をめぐっては、室町時代を通じて反乱・騒擾事件が相次いだが、それらはいずれも、「足利」姓を名乗る誰かを推戴するかたちで起こされている。つまり、応永六年（一三九九）の「応永の乱」は大内義弘が足利満兼を、応永二三年（一四一六）の「上杉禅秀の乱」は上杉禅秀が足利満隆・足利持仲を、嘉吉元年（一四四一）の「嘉吉の乱」は赤松満祐が足利義尊を旗頭に立てた。そして応仁元年（一四六七）に勃発した「応仁の乱」では、二派に分裂した勢力がそれぞれ足利義視・足利義尚を自陣営に取り込むことで、その正当性を発揚したのである。

如上の構図は東国でも変わらない。かつて足利氏と同格を自任していた結城氏でさえ、永享一二年（一四四〇）の「結城合戦」では、鎌倉公方・足利持氏の遺児を擁して幕府に軍事抵抗を試みた。その後、群雄割拠となった関東地方では、戦国大名化した各地の武家が、その軍事行動の口実として古河公方・足利氏への助力を掲げるようになる。

本書の白眉は、こうした室町時代中期以前の戦乱の分析から、各地の武家の中に「足利氏に対抗できる者はかたちのうえではもはや別の足利氏だけ」という価値観、つまり「足利」対「他氏」などありえない」という観念が定着しつつあったことを発見したことであろう（五七頁）。つまり足利氏は、武家にとって倒す対象ではなくなったのだ。その根底には、足利氏の「血統」を裏付けとし、その係累を「貴種」として絶対視する「共通価値」の生成があった。この点こそ、足利将軍家やその連枝の家系（たとえば古河公方・足利氏）が断絶しなかった理由であり、同時代の足利氏を「武家の王」と呼びうる所以である。

四

ところで、すでに本書に対しては、足利氏を「武家の王」と表現することについての疑義も呈されている［君塚二〇二一］。たしかに本書には、同時代に政治的・制度的に厳然たる「王」として存在した天皇と将軍・足利氏との関係性が詳述されていない。だが、当時の武家にとって、足利氏が殲滅してその権力を奪取すべき存在ではなく、むしろ担いで奉じる「玉」として認識されていた点を明らかにしたのが本書であり、そうした属性は「王」たる天皇の位置づけと似通うものがあった。したがって、本書でいう「武家の王」とは分析概念なのだが、本書の中で、この点に関する説明がもう少しあれば、語用をめぐる誤解は避けられたであろう。

前述したように、私は、著者が足利氏を「武家の王」と称したことに特段の違和感は抱かないが、むしろ気になったのは、本書で足利氏が「武家の王」であることを根底において担保したとされる「血統」についての理解である。これも「血統」としか表現できない観念があったと仮定しなければ、なぜ同一の氏族が長年にわたり「貴種」扱いされたのかという同時代の状況を把握できないことは、私も首肯できる。

だが、これも分析概念であることに注意喚起を促さないと、あらぬ誤解を招くきらいがあるのではないか。私が「武家の王」よりも「血統」の語用のほうがより重要だと考えるのは、今日の日本では「武家」も「王」も完全な歴史用語であるのに対し、この語は「血統書」や「良血統」のように、現在でも使用される言葉だからである。

贅言するまでもなく、「血統」とは先祖から子孫にまで同じ成分の血液が受け継がれていることを前提とした系譜的観念であり、これこそが〝血がつながっている〟という意味での家族・親族の生物学的根拠だと見なされる場合が多い。親等の遠近も「血が濃い」「血が離れている」といったかたちで表現されることも珍しくなかろう。

問題は、そうした観念が、本書が対象とする時代にすでに存在したのか否かだが、この点については、関連する分野で多くの研究業績のある歴史学者・西田知己の議論に寄り添いながら述べると、室町時代の段階では「血統」という観念は成立していない［西田　二〇二一］。西田によると、「血の継承」という考え方自体は中世の西洋社会で培養され、それがキリスト教とともに日本に伝来した可能性が高いという［同上　九二頁］。ゆえに、尊属と卑属には同じ成分の「血」が流れているという今日一般的な観念は、日本の場合は中世後期以降、具体的には徳川時代に洗練され、

広く世に定着したものだといえる。そして「血統」という用語が登場するのは、さらに後の明治二二年（一八八九）に刊行された『大日本帝国憲法義解』だとされる［同上二八四頁］。

翻って、中世日本の「血」をめぐる観念については、病気や怪我による出血が「死」を連想させることや、室町時代に伝来したと考えられる『血盆経』の影響などにより、これを「穢れ」と認識する向きが強かったと考えられる。したがって、当時の人々が「穢れ」である血液そのものを、生命力の根源や、あるいは尊属・卑属の生物学的連続性の根拠として認識するケースは少なく、むしろ「もっぱら忌み嫌われる対象」［同上　七頁］として捉えられていたとみるのが妥当であろう。ゆえに「血統」は、すぐれて近代的な用語・概念だといえる。

しかしながら、中世期に、親の身体の一部が子に継承されるという考え方じたいがなかったのかというと、そうではない。それは「骨肉」であったとみられ、その継承のさまを表現する用語としては「筋」や「筋目」が使用されていたとされる［同上　三一―三二頁］。してみると、本書でも「足利的秩序」の正当性は、同じ「骨肉」を継承した足利氏の「筋目」によって担保されるものである、と記すべきだったのではないかと個人的には思った。

五

いずれにせよ、生物学的に同質と見なされた一つの家筋が「貴種」視されることにより、足利氏は独特の立場性を構築した。そうなると、足利氏から分かれた「足利一門」の武家もまた、多かれ少なかれ「貴種」扱いされるのは半ば必然であろう。彼らと〝本家〟たる足利氏との系譜的距離の違いにより、「足利一門」に連なる武家たちは相互に序列化され、これが「足利的秩序」を維持するための直接的な基盤となり、幕府執政の屋台骨を支えることになる。本書によると、室町幕府の高官を輩出した細川・山名・畠山・吉良・斯波などの各氏は、おしなべて「足利一門」であり、佐々木・大内といった「非足利一門」の武家たちよりも「優越する儀礼的身分・格式を得ていた」（一〇〇頁）という。こうした傾向は各地に下向した武家たちの間にもみられ、たとえば戦国期の東北地方では、最上・天童・畠山といった「足利一門」と見なされた武家は、伊達・葛西・南部などの「非足利一門」の有力国人よりも一等上位に置かれたという（一一八頁）。

要するに、室町幕府のガバナンスは、中央／地方を問わず「足利一門」の権威によって実現していたといえる。本書ではじめて知りえたのだが、しばしば初代将軍・足利尊

氏のライバルと目される新田義貞も、実は「足利一門」だったという（八四～八六頁）。そうなると、〝本家〟たる尊氏と〝一門〟に過ぎない義貞との間には歴然とした家格の差があり、端から喧嘩にならなかったのではないか。両者を永遠のライバルとして描いたのは『太平記』から派生した〝講談的歴史語り〟であるともいえ、著者はその「太平記史観」の超越を強く訴えている（八八頁）。

ところで、かかる「足利的秩序」は、当の足利氏の側が「足利一門」以外の武家を恃んだことで潰えてしまう。つまり、一三代将軍・足利義輝が三好長慶や松永久秀を、一五代将軍・足利義昭が織田信長の力を頼って権力維持を企図したものの、彼らは逆にその相手から排除されたのである。

この点について著者は、足利将軍による「「力」さえあれば、「血」はなくてもよいという血統軽視策が足利の血統の価値低下を引き起こすのは自明」だったと述べている（一五一―一五三頁）。つまり室町時代の終焉は、当の足利氏自身が招いた椿事といえるが、このことは、譜代大名の合議により施政方針を決定していた江戸幕府が、黒船来航を機に外様大名を幕政に参画させた結果、かえってその寿命を縮めたことを想起させる。「歴史は繰り返す」という諺言は安易に使いたくないが、どうしてもそのように映じてしまう。

六

以上のように、本書は件の「共通価値」論を切り口として、従前の足利氏の評価、もっといえば室町時代のイメージそのものの転換を迫った意欲作といえる。最後になったが、本書全体の論旨に関わる独創性について触れておきたい。

前述したように、室町時代史研究は、長らく戦国大名や国人領主の動向を中心とした地域史・社会史への着目がトレンドであったが、二〇〇〇年代以降、斯学の関心は国家史・政治史へと回帰しつつあるという。この点の学史的背景については、著者のもう一つの新著『分裂と統合で読む日本中世史』［谷口　二〇二一］に詳しいが、著者の歴史観にしたがうならば、少なくとも日本の歴史は人間／社会の「分裂」と「統合」の繰り返しであり、ことに室町時代史は「分裂」面が目立ちやすいため、如上の地域的権力への研究も隆盛した。しかし一方では、「統合」のよすがとなった天皇や「武家の王」たる足利氏の存在感は後景に追いやられ、その正当な評価が遅れがちであった、ということになる。

「分裂」と「統合」という観点からすれば、本書はいうまでもなく後者にフォーカスしたものである。しかも足利氏が、各地の武家の「統合」の依代だったとする新しい一面を描出しえたという意味において、本書は今後、室町時

代史を再考するための叩き台となるであろう。

さて、現代の日本人にとってメジャーとは言い難い室町時代を対象とした著作が、なぜ平成時代後期に注目されたのかという本書評の最初の問いに戻りたい。

本書で私が学んだ知見を踏まえると、それは現在の日本社会が「統合」の段階から「分裂」の局面へと入りつつあり、それが室町時代前期の歴史と重なるからだ、と考えたくなるのだが、これはいささか牽強付会だろうか。折しも平成時代後期は、近代以降はじめてとなる天皇の生前譲位が決定し、その存在感がいや増した時期である。同様に、鎌倉時代末期から室町時代前期に掛けての時代もまた、天皇の存在感が俄然増大した。だが、それへの幻滅も短時日のうちに訪れ、代わって有力武家が政治的にも軍事的にも統治の主体として復権するというプロセスをたどったのである。

今日では現実問題として、一内親王の降嫁をめぐって噴出した各種のスキャンダルにより、皇室の権威は揺らいでいる。他方、各地では新興のローカル政党が国政でも勢力を確実に伸長させ、旧来の政治的イデオロギーは求心力を失いつつある。こうした動向が本当に「統合」から「分裂」への志向性を傍証するものだとしたら、新たに希求される「統合」の依代は、いったい何なのだろうか。本書が明らかにした歴史は、実は現代社会の行く末を見通すうえでも多くの示唆に富んでいる、と私は思う。

参考文献

君塚直隆　二〇二一　「室町幕府はいかに存続したか―「共通価値」（足利氏の権威）を軸に検討」『週刊読書人』七月一六日号

鈴木由美　二〇二一　『中先代の乱―北条時行、鎌倉幕府再興の夢』中公新書、中央公論新社

亀田俊和　二〇一七　『観応の擾乱―室町幕府を二つに裂いた足利尊氏・直義兄弟の戦い』中公新書、中央公論新社

呉座勇一　二〇一六　『応仁の乱―戦国時代を生んだ大乱』中公新書、中央公論新社

谷口雄太　二〇一九　『中世足利氏の血統と権威』吉川弘文館

谷口雄太　二〇二一　『分裂と統合で読む日本中世史』山川出版社

西田知己　二〇二一　『血の日本思想史―穢れから生命力の象徴へ』ちくま新書、筑摩書房

山田康弘　二〇一一　『戦国時代の足利将軍』吉川弘文館

（本学兼任講師）